文

わたしの部屋の知らない距離のなかで

島さち子

わたしの部屋の
知らない距離のなかで

装画　　島　さち子

わたしの部屋の　知らない距離のなかで

することもなくて、朝からうとうとしている。ときどき、うっすらと目を開けると、しめきってある障子の桟が、空気と光をふくんで、灰色にぼうっとかすみ、交わりの一つ一つがひもでゆわえたように黒くふくらんで見える。目の裏側もほの明るくて、泡をつらねた奇怪なものが、アニメーションになって、ひょこひょこ動きまわり、こめかみを枕に押しつけると、快い圧力で、目のなかが暖かくなって、像の動きはクリーム色の靄にとけてしまう。

突然、足に感電をし、ビリリッときて起きあがった。一瞬みた夢に右足はしびれている。わたしは

投げ出されている不恰好にまがった足に手をのべ、猛烈にこする。いつまでも足のなかに、小さな火花がパチパチとはねかえっているが、ふたたび仰向けにねころぶ。休むときめられている日を休んでいる安心感とちがう。日曜日ではない。

――二十四日型なのよ。ほんの話のはずみで、わたしは言った。わたしだけでなく彼女たちも口で言えそうなことは、なんでも言葉にかえてしまっていたのに、

――まあ！　おさえた声でおどろいた。

――大変でしょ。足がお悪いのだから、お休みなさるのが当然よ。わたしたちも休めばいいのに、たくまし過ぎるものだから……。

足の悪いわたしに同情することが、心の化粧であるかのように満足げな顔でみんなはうなずき合っていた。わたしはしばしば生理の為の休暇をとり過ぎているから、ほんの軽い気持ちでいっただけなのに、みんなはいまさら、二十四日型？　ほんとかな？　三十日にくらべたら、一年にしてみると大変な違いがある。年に何日休む勘定になるか……？　などと、繰り返し計算をして口惜しがったに違いない。

――だから、責任のある仕事はさせられない。予定がみんな狂ってしまう。彼女たちが仕事を与えているのでもないのに、わたしのいないところで言っている。しかし、就職半年、未だ非常に親切であ

ることに変りはない。痛みようもない昔からの悪い足を痛いかと聞く。わたしは、うん、痛いといって、現在病気中という甘えた気持ちになる。

もう少ししっかりしていた時代もあった。子供のころは、誰にも同情されず小気味よい言葉を投げ合っていた。

――あんた、ガラス拭きしなよ。教室の掃除をしていたとき、わたしの掃きかたがのろいので誰かがいった。

――足が悪いから、窓にのぼれないもの。

――あんなこと言ってずるい。椅子を持って来てあがればいい。

わたしは必死で窓にのぼりつき、長年の雨ざらしで、ペンキがはげ、けば立っている老朽校舎二階の窓の縁につかまり、ちぎれた新聞紙でガラスをこすった。目の位置をかえ、すかしてみる度に生れてくる煙色をしたくもり、透明なガラスの、どこかに隠れている全部のくもりを浮きあがらせ、ふきとるのに夢中だったわたしは、信じきって身をもたせかけていたガラス戸がはずれ、一緒に傾いて、虚空に放りだされ落ちていった。

気がついたとき、木もれ陽が土の上に尻もちをついている、わたしのマツゲや鼻の頭にゆれ、上を見あげると藤棚があって、若いつるがちぎれてたれさがり、なにかがのぞいていた。おそろしく目の

なかが明るかったのに、ガラス戸のカドだと気づくまで、しばらくかかった。小さなわたしだけ、藤の葉のしげみをするりと抜けて地に落ちたのだ。二人の先生と子供たちが、わたしを輪でかこみ、びっくりした顔で見つめていた。かすり傷はあったが、笑って立ち上がろうとすると、

――足をいためたの、痛いか？　男の先生がきて、いきなり、わたしの足にさわった。

――病院にいこう！　おんぶされるとき、先生の肩にあごがガクンとぶつかった。女の先生が急に笑いだした。

――先生、先生！　その子、　もともと足が悪いんですよ。もともと障害児なんですよ！

わたしは男の先生をだましておんぶしてもらったような、心の痛みを感じて、息をとめていたが、ほっとして、

――わたし、まえから足が悪いの。先生の広い背に向かって言った。

――両方か？

――ううん。

――片方だろう？

――うん。

――悪い方が悪くなったんならいいけど、よい方が悪くなったら大変だろう。男の先生は、大股に歩

いて校庭をよこぎり、学校の前の外科病院につれて行った。レントゲンをとられ、少し痛んでいた肩に、マーキロみたいなものを塗られただけで診察はおわった。誰一人甘い言葉で思っていることを、ごまかしはしなかった。もともと足の悪い子が足を痛めても同じことだと思って、女の先生が喜んだのか、怪我はないと判断して喜んだのか、今でもわからない。

畳の上にころがって、わたしを休ませることによって満足している人々のために、目を閉じる。目の裏側に輪をつないだ漫画じみたものが、また動きまわる。

――こんなものなのよ。わたしは白い紙に、いくつかを描いてみせる。

――脳腫瘍かもしれない。

――眼精疲労でしょう。

――誰も描いたことのない漫画だわ、これなんか奇抜！　フエルトペンで描いたものは、はっきりしすぎだ。あどけない男女不明の子供の姿になっているが、もっとかよわい泡を連ねた一つの形としてはとらえようもない、ずっと、不確かなものなのだ。

目を閉じる。体中に、ものういものが充ちて、眠りすぎたみたいな、眠りたりないみたいな、体の

重みを畳にまかせきる。横たわった体の上を音が走る。窓から障子へ、一方通行に走る。聞こえてくる音に方向があるという、当たり前のことに、わたしはどうしてこだわっているのだろうか？　風上のどこかからの人声、言葉に意味があろうが、なかろうが、なんの妨げにもならない。しらない誰かが、どこかの誰かに向かって話し掛ける言葉は、わたしの体の上を流れていっても、わたしに聞かれることを求めてはいない。

目覚めのなかの眠り、眠りのなかの目覚めにいて、昨日までしなければならないと思っていたことは、すべて、する必要のないことになってしまっている。わたしの表情さえとらえられないところに落ちこんで、笑わない、悲しまない、倦怠のあくびさえしない、疲労さえ現れない。流れ去って行く音を追いかける無邪気な企てをしてみたところで、大部分は逃がしてしまい、とらえたものも、すぐさま風化してしまう。

――聞いていなかったの？　必ず指定された時間まで、仕上げなければならなかった仕事なんだよ。

――しなかったんです。

――聞いていなかったんだな。

――しなかったんです。

――しなければならなかったんだよ。

――それで……。
――それで、しなかったから、しなくてすんだんだ。
――よかったわ。
――聞かなかったんだな、よかったとはなんだ！
　してもしなくても、聞いても、聞かなくても、要するになにかしら真面目なことで、自然なことであるらしい。うす目をあける。障子は、さっきより白のなかに黒の部分がふくれ、柱と柱、鴨居と敷居の間を埋め尽くしている。黒いふくらみは、ほこりがたまって煙ったのだろうか。
――この部屋はひなたのようだ。わたしが障子のそばで笑ったとき、彼が言った。
――ひなたはゴミがよく浮いているもの。わたし一人のときは日影のように空気は澄み切っているのに……。
　うつぶせになる。
　枕もとにおいた竹篭に、パンとチーズ、トマトが入っている。上体をすこし持上げて手をのばす。すぐそこ、枕にしているクッションの左側。手にさわらない。畳のうえをさぐり、体を乗り出し、手のひらに重心をかけ、尺取虫みたいにのばしていく。とどかない。
　眠っているうちに手が縮むことがあるのだろうか。肩に目をおいて手の指先を眺めると、下はくの

ふくらみのかげに、細い手首はかすみ、指先は遥かかなたに小さく見える。
縮むより伸びた感じ。体を真直ぐに向け、本格的に腹這いをしてみる。大分進んだと思ったころ、ようやく手が目の前の竹カゴにとどいた。畳が大きくなったのでもない。目か運動感覚の異常だろうか。ふたたびもとの位置にもどるのに、また同じくらい後退りする。
牛のように腹這いになり、枕に胸を押しつけてチーズをかじる。呆けてなんかいない、味があるもの。頬杖をついて考える。
と……、道路側の窓から、雑音のかたまりがわっと入って消えた。その音の消え方、真空に吸い込まれたようだ。消え去って戻ってくるあてのない方向に耳をすます。こんどは、枕もとの右側にあるメガネに手をのばす。ためらいながら、指の関節、手首の関節、肩、順に意識的にのばし、メガネのうえに手をおく。すぐそこにあるのだから、そこにある。あたりまえのことにほっとし、ケースから赤いフチの眼鏡をとる。わたしは見える目で凝視する。なにものかが、しらないまに、どこから湧き出たのだろう？　灰色にとけて、ふくらんでいた障子の桟は鋭く確かな平行線で伸び直角に交わりあって鮮明に四角形をつくっている。けれども、奇態なものが一つ一つの四角のなかにおさまっているのだ。
ビルの一部屋ごとに人がいるように、障子の一つ一つのマス目を住みかに生活している気配。黒ア

リに似ていながら、もっと立ちあがった、二本足とも四本足とも、毛深いとも、殻でおおわれているとも判断できない。アリにしては大きすぎる体、体にしては大きすぎる目が二つ。障子は、白さのなかに、編目のような紙そのものの持つ厚さのうすぐもりを見せ、それを背景に彼らがうごめく。

――ハタキをかけたことないから……。凝視をちょん切り、ごみを吸い込んだような小さな咳を幾つかして、不精な自分を、わたしは、しょうのないひと！　と、たしなめる。

わたしが彼らを見る以上に、彼らはわたしにとらわれて、それぞれの位置から数百の目を注ぐ。ささやいている、ささやき声は聞こえない。グロテスクな巨大な動物であるわたしは、どぎまぎ足もとをととのえる。

立ち上がった。何気なく歩き出したけれども動作と意識がちがう。足をふみ出していることがわかりながら、進めない。不自由な足をひきずり、高層の住宅の全部の窓からのぞく群衆の視線にさらされている。わたしに頭を垂れて歩く習慣はないが、足を踏み出していることを確めるために下をみる。

畳の目は動いてはいるが、極度に度の強いメガネをかけている時の感じで、畳とは別の空間を浮いているようだ。たしかに足は出ているとわかりながら、逆まわりのコンベアの上にいると同じで進まない。そのへんの理由が複雑な組み合わせのレンズ群を通して見ているように理解できない。経験したことのない思考の渦。進めない前進を心のなかでも、体と別のやりかたで試みているが、同じよう

に進めぬ前進から逃れられず、錯綜し、彼らに引き寄せられる。
たえず逃げていきながら、決して逃げ去らない、この部屋の物と光のなかで、漸く帰る方向をみいだし丸く歩く気持ちで方向転換をして窓際に向かう。足の小指のひしゃげた爪が汚くみえる。右足の関節が、内側の不自然な方向に寂しげにまがる。
夏の夜、あかりを慕って飛んできた虫が、照明にぶつかって落ちたとき、つかまえ、クッキーの空き箱に入れて置いたことがある。うろうろ這い回ったあと、箱のふちに登りはじめると落し、しまいに足をむしって、よたよたしているのを見ていた。あのときの虫とそっくり。見ているのが虫で、よたよたしているのがわたし。
濃霧に迷う飛行機と同じに、遠近を目で測ろうにも測る手段を失っている。障子に向かって歩いただけの歩数を、反対に歩けばもとに戻るという簡単な理屈を忘れきって、未踏の荒野にひとり踏みこんだ冒険者の気持ちで奮起したとき、いつのまにか、そこまできていて、のめって体を窓にぶっつけている。ガラスは音をたてて割れ、下に落ちる。
――ユキさん、どうなさったの？　お怪我はなかった？　下宿のおばさんが二階を見上げている。
――ええ、すこうし。かすり傷もないのに、わたしはあっさり彼女の調子にのってしまう。
――お薬あるの？

――ええ、あります、いろいろ……。障子に虫？　がわいたのを見つけられたら困る。

窓からみる外は、何時もとなんの変わりもない。景色のなかで、今朝と今のあいだに時間は見えない、わずかな違いは、太陽の浸透ぐあいに見えるくらいなもの。

小さな家が軒を重ねてつづき、ずっと遠くにビルが並んでいる。夏であるのに比較的涼しい日で、からっぽの空の片すみを、アミーバ形の雲が分裂しながら流れていく。

澄みきってもいない、汚れていて汚れきっても見えない。聞こえていて聴きとれない騒音。いつもと同程度の無秩序と無関心にいるおだやかでもない、おだやかな世界。

わたしのいるこの窓の、内と、外と、ひとつの常識的なつながりにあって不思議はないはずだ。窓の下に、飛び越えられない地割れが口をあいているわけではないから。

下の道を女の子たちが肩を寄せていく。なにを話しているのだろう。なにを言っているのか聞きたい！

首だけ回って後ろを向く。信じられないことが、やはりそこにある。そこに、その隣りに、その上に、その斜め上に、その下に、右上の隅から下へ三段目の障子の四角に、四、五人のグループ。うわさ話をしているのだろうか？　人間なら、視線と視線がぶつかると、一瞬、こちらを見なくなるものなのに、彼らはなにやら充実し、大きな黒目がじっとしてさまよいもしない。だから、こちらが、押

えようもないほど、ゆらゆらしてしまう。わたしこそ、彼らの家の一つ一つを覗き込む権利があるはず、わたしが部屋代をおさめているのだもの。

障子の方へ、一歩踏み出すことにためらいを感じたが、一種の迷いのなかにファイトが生れ、足の悪い体に対して残酷なほど力がわいてくる。誰がみていても、わたしは、わたしにできるたった一種類の歩き方しかできない。

足に竹カゴがぶつかって、トマトが一つ飛び出す。

……まさか、わたしの足に対して障子までの距離がどんなに遠いにしても、食料持参でいかなければならないほど遠くはないだろう。長い間、頭のなかの同じ場所で、ぐるぐるとまどっている思考と同じに、歩を運んでも進みはしない。気持ちよく歩幅は出ている。深い砂の上を歩くような、まだるっこしさは感じない。この部屋の窓側はそれほど伸びてはいないのに、障子に近づくにつれて、恐ろしく距離が伸びてしまっているらしい。カゴをとるときは遠かったのに、メガネを取ったときは、すぐ傍にあったのは、それが窓側にあったか、障子側にあったかの違いではないか。

二十分歩いて、五分腰をおろして休み、十分歩いて二分休んだ。たった十二畳の部屋のなかで、砂漠を行く旅人のように歩き、疲れて休む。障子の高層ビルも、その住人も、砂漠の蜃気楼だというのだろうか。それまでわたしの体をささえていたバネが、突然ひきぬかれ平べったく伸びる。

窓から助けを呼ぶ以外、手段がないのだろうか。……助けて！　と叫ぼうか。わたしは助けてと言わないうちに助けてもらうことに慣れきっている。自分から助けて！　と叫ぶだなんて……。何かが止まって変化することを止めている。起き上がらなければ、永久に封じ込められてしまう。わたしの――起き上がり歩いたところで永久に封じ込められてしまったのかもしれないわたしの、畳の上につぶれている体の大小の丸い部分、右膝の円をのぞいて、全部の円が除々に大きく拡がっていく。右膝の円だけそのまま、ちぎれた一本の神経がぐるぐる時計の秒針のようにまわっている。

どこかでとめどなく流れる水道の蛇口に口をよせて水をのみ込んでいる誰か。どこかで部屋のなかからひと足で外に飛び出していった誰か。いま掃除機に手がとどいたら、この距離の大群を一網打尽に吸いとりたい。目の前に昨日から垂れ下がっているおくれ毛が、昨日と同じ長さで、位置で、カーブで邪魔になっている。引っ張れば痛い。鏡のそばにいきたい。わたしの瞳孔が楕円形や、ひょうたん型にかわり、赤い狂気の証拠が見えるかもしれない。ゆうれいは鏡に写らないというが、障子のなかの生物たちは写しだすのだろうか？

障子の一コマに、小さく納まっていた一匹の生物が、いきなり巨大にふくれあがる。

廊下に立つ人影。名を呼びもしない、入ってよいか問いもしない、なにも言わない。彼だ。長い体の肩の高さが、いつもと同じに左右ふぞろいだ。――どうぞ――幾つかの声で言ってみる。声は彼の

影をめざして進んでいくふりをしながら、しーんと下に沈んでしまう。彼とわたしの間に無限の距離があって、声の波が距離の堆積のひだに落ち込むのだ。彼は、投降する兵士のように、両手をいいかげんな高さにあげて下ろす。障子を開けようとはしない。障子を開ければいいのに……。障子がきしんで動き、彼らの社会と、彼らの社会が二重に重なり合う、奇妙な事態を待っている。彼らの一つのビルが、彼らのもう一つのビルで目隠しされたとき、その半影のなかに沈んで、彼らは飛び交うのだろうか。這い登り、這い降りるのだろうか。いまと同じ、もの見高さで、彼らのもう一つのビルの裏側を見つめるのだろうか。……どうぞ！　早く！　わたしの試みである大きな声や小さな声が、耳を手のひらで叩いているように、みだれて聞こえ、消える。

疎である筈の、薄い紙一枚、障子のこちら側から、あちら側へ、声がとどくという、あたりまえのことが、いまでは奇跡に変わってしまっている。

あいた障子の間から、無限の広がりをもつこの部屋に、踏みこんでくる彼、その顔がみたい。おじけづいて踏み出す一歩一歩が、片っ端しから距離にのみこまれる光景を観察したい。

障子から少し離れ、棒のように細長くなった彼の影は、部屋のなかの声を待って、左右に二、三歩行ったり来たりしている。

外側から白い障子の紙をすかして、巣くっている生物が見えないのだろうか。

――障子を開けても、構わないっていうのに。早く、開けたらどうなの！

生物たちにしても、背後をおおっている巨大な影を感じないのだろうか。ときに桟を往き来し、障子の紙のどこかから滲み出る生物もあるが、影特有の動きだというわけではない。依然としてわたしに視線を集めている。

――後ろをごらん。わたしなんかより、おかしな人間がいるのよ。彼は障子に手をかけようともしない。あまりにも簡単にあきらめ、階段の方に去って行く。ほんの少し、戸の木枠の部分を、コンコンとノックすれば、この妙な空間が、どこかでほころびるかもしれないのに、彼のわたしに対する関心はこの程度のものだったのか？

窓の下を通って帰る彼を、窓に駆け寄って呼び止めなければ、誰がいったい障子を開けて助けにきてくれると言うのだ。視線は窓まで一秒とかからないで走るが、わたしは、自分の体をいくつかの方向に裂く動作で、いままでの何百倍、何万倍も足を引きずって駆けるとしても、たやすく行き着けないのだ。障子の住人たちが生活の営みを忘れて、それを待っているから、わたしは障子に背を向けてとぼとぼ歩かなければならない。たった一間の、それも間借りのわたしが、何キロもの道を、また辿らなければ、同じ部屋の坐りたい位置にも到着できないという奇妙な状態。

疲労しきって、ようやく窓辺にたどりつき崩れる。ここまでくれば、物理的には震動もあり、音も

しているが、出ることのできないオリの中にいる気分だ。オリの中なら、おびただしい目で覆われている壁があってはならない。狭くなければならない。砂漠を行く旅が可能であってはならない。

彼らは無言、こうして坐っている限り、ほのかな関係でしかない。二つの世界は互いに見えるという以外、何もなさそうなのに認め合わなければならなくなっている。芝居の黒子のように、わたしというこの部屋の主役の引き立て役だとおもってしまおう。なれているじゃないか。そう、ひとから特別扱いをして大切にしてもらわないと、さびしいくらいだ。

障子の向こうに、ふたたび大きな影が現れ、なにも言わない。面と障子に向かっている背の低い胴体、下宿のおばさんだ。彼女は戸を開けようとしている。腰をまげて、手をかけて、足を踏ん張ると、お尻のエプロンの結び目がおどる。ふとい腕のなかに太さにふさわしい力が充ちているのなら、小動物の五十や百の重さの乗っかっている障子くらい、簡単に動かせるはずだ。動き始めるまでの力、それが問題らしい。

わたしは障子がきしんで動き、彼らの社会と彼らの社会が、二重に重なり合う奇妙な事態の起こるのを待っている。開いた障子の間から、踏み込んでくるおばさん、彼女の顔が見たい。さっきのわた

しと同じ砂漠をいく旅人のように、この部屋のなかを歩きつづけるだろう。

障子はどうしても開かない。当然のこと、彼女のいる空間と全く異質の空間がここにあるのだから。影が両手をひろげて戸をはずそうとし、影が上下に震動する。激しく影だけが動くが何の響きも伝わってはこない。成功しない。更に影は人差し指をなめ、障子に穴を開けようとこころみる。彼と違って、これだけ積極的に入る試み、覗き見する試みをしている理由が知りたい。彼女はわたしが部屋のなかにいることを知って入ろうとしているのか、いないと思って入ろうとしているのか、もしも、いないと思って、これだけ積極的に入る試み、覗き見する試みをするとなると、いつも入って昼寝のひとつもしていくのではないだろうか。この家では、二階のこの部屋だけが明るく広くて居心地がよいのだ。わたしひとりのための閉ざされた部屋ではなかったのかもしれない。

障子に穴はあかない。

彼女に覗き見されないことを喜んでいるわたしがいる。おばさんは、ついにあきらめて消える。

窓の下で人声がする。おばさんと彼だ。

――まだ、お帰りにならないわよ。彼女は歯切れよく言い切っている。障子が開かなかったことも、

紙に穴が開かなかったことも、全く不審ではないかのように……彼女はむずかしく理解に苦しむことは大抵の場合、無視することによって解決してしまう。

――違いますよ。遅刻だったけど、お出かけになったのよ。

勢いよくひびく声で身ぶりをまぜ、彼の言葉をさえぎり、行手を遮っているかたちだ。彼が一歩前にでる、彼女は横にちょっと体をひろげる。

――ほんとにお留守なんですよ。彼は帰るとも止まるとも、どっちつかずの動作を繰返す。

――まさかここでじっと立っているわけにもいかないでしょ。彼女は茶色の蔓で編んだカゴを太い腕から抜いて握ってぶらさげる。

ポケットのなかをさぐるが適当なものがないので、わたしはワンピースのボタンを一コもぎとって投げる。ボタンは空気の抵抗で雪のひとひらだ。三秒ばかり後、彼女はわたしを見上げる。

――あら、ユキさん、いつお帰りになったの。

――部屋から出られないの！

――ええっ？　なんですって？

――部屋から出られないの！

――ええっ。彼が白い帽子をとって、ちょっと手をあげる。彼の脳天が二階からよく見える。ずっと

前にも、こんな位置から彼を見たことがあったようだ。何時だったか思い出せない。こんなとき、彼の驚いた表情、または力強い言葉がほしいのに、彼はなにか言おうか言うまいか迷っているような、はにかんだ笑いを浮かべて見上げているばかりだ。

彼が体当たりで障子戸をこわそうとする、びくともしない。おばさんが制止する。細く高い彼と、太く低い彼女のシルエットが表情をもって動く。

わたしはじっと動かず、彼と彼女の、つぎの動作を待つ。その方向からの音が失われているから、見ることと、待つことを、順番に意識して、わたしはじりじり年をとっていきそうな不安にとらえられる。

障子に突っ込もうとするニギリコブシが向こう側にはねかえっている。二人は突っ立ったまま何かを考えこんでいる。

ついにハシゴをかけて、彼が窓からのり込んできた。わたしは、急にしゃんとする。背後の障子にひかえているのは、わたしの一族であり、一族をひきいた大家族制度時代の家長のように、身内のものどもを無視し、一対一として彼を見る。

――帽子をとったら！　彼は意外な面持ちで帽子をとる。

――だから、はげてしまう。彼は頭をかく。わたしの前で頭をかく人間は、彼がはじめてだ。わたし

は足が悪いから、たいていの人に優越感を覚えさせ、頭をかかなければならない不始末をしても、わたしの前では一瞬それを忘れてしまい、頭をかきはしない。

――頭をかくからはげるんじゃない。言ってみたが反応はない。

わたしは彼の前に存在しなくなり、彼はすでに背後にひかえている障子の生物たちにひかれ、あやつられ、たぐり寄せられている。鼻の頭が異様に光る。大衆の眼にさらされたことがないから、わたしより、ずっと抵抗力がないのだ。

巨獣が一匹、一つの背景の、一つの画面のなかで体がゆれ、二、三歩で障子のそばに行けそうに見えながらそこにいる。両足がひきつって、右足を出すと右肩が上がり、左足を出すと左肩が上がる。真直ぐになり、本来の体の傾きをそれとなくとり戻すため、カカトをあげて伸び縮みする。足の裏で全身の重みを知ろうとし、ヒザで、ヒザから上の重さを知ろうとし、腰で、足を除いた重さを知ろうとし、首で、頭の重さを知ろうとしているかのような、どこかとぎれとぎれの分解した動作だ。彼は背をゆすり終わると、彼らに向かって何かどなる。聞こえないがわかる。右足でとめどなく貧乏ゆすりする。歩いてもそこにいるのなら、この部屋のなかでの歩きは貧乏ゆすりに似たものだ。

壁の方へ歩く。障子とは直角に……、壁を押し、たたき、後ろを向き、反対側のクローゼットまでいき、手を這わせて障子の方へ動く。この部屋は幅はそのままで、障子に向かってだけのびているら

しい。クローゼットの表面を這わせる手が、動きながら微妙な光の曲折のうちに同じ場所にとどまっている。

彼はタバコを吸う。口から吐く煙がただよったままだ。確実に障子の生物に対して敵意を伝えたいというのか。彼は部屋からはみ出るほど大きなモーションで、豪速球を障子に投げる。突き刺さったように見えたが、まっすぐ彼の足もとに落ちた。ライターが光っている。拾おうと体を丸め、手で畳を掃くように歩いていく。投球動作で傾いた帽子が落ち、障子の視線が彼の髪の薄い部分に集まる。遠近感が狂って、帽子をつかまえるのに汗だくだ。

彼らと近づきになりたいにしては、あまり動きすぎる。さらけ出しすぎる。やっつけたいのだろうか、やっぱり、わたしよりずっと、見られることに抵抗力がなくて落ち着かないのだ。いつか動物園でみたカバは、一日中、見物人に小山のようなお尻を見せたまま、微動だにしなかった。あれでなければ……。

笑ってあげたい。わたしの顔じゅうの筋肉が力一杯はねかえって、てんでばらばらに動いて笑い出してしまう。

彼の祖父、父、叔父、兄、みんな三十代半ばで、綺麗にはげあがったという。彼も同じ運命にある。

――わたしと同じくらいの肉体的弱味をもっているから、ふさわしいと思っているんでしょう！

――弱味じゃない。
――そうね、そうなるのが一番あなたらしいわ。そうなるあなたを、あなたはずいぶん気にいってるみたいね。
――そうだ、毛がぬきとられるのは人類の進化だよ。
――ふーん、進化が気にいってるの？　彼は強がっては見たが、気に入っているとも言えなくなって、半分冗談めいた言い方をする。
――ぼくは父や兄みたいにならないうちに、秘密でカツラをつけてしまうかもしれない。
――あなたは、自分の進化に自信をもたなければ……、わたしも、自信を持たなければ、進化は人間を歩けなくするんだもの……。わたしは自分の言葉に合槌をうつ。
彼は漸くつかまえた帽子をあわててかぶり、わたしの方をはじめてふり向く。あるいは、そこにころがっている食物の入っているカゴを見たのかもしれない。こちらに向かい、逆転しているベルトの上を歩いてくる。
――駆けたらどうなの。彼が駆けてくる。超スピードのつもりが、止まって見えるおかしさ。
わたしと一緒に、同じ傍観者である障子の彼らも笑い転げてほしい。黒い生物たちとわたしは、幸運にも、話し合わずに目だけで理解しあっているように、進まぬ前進をしている彼をはさんで、おか

しなふうに向かいあっている。
不器用なこわ張った手を腰において、猛スピードの足踏みを積み重ねている彼。何時のまにか、わたしも、黒アリの怪物のひとりになって、一度も誰にも、教えられたことのない前進のしかたで、大胆にも、届かない障子に達してしまい、彼らと、彼と、わたしの、わけのわからない関係の原因が、しだいしだいにわかってくる錯覚に陥って、快い笑い声をたてている。
彼の足音、そのひびき、あえぐ音が聞こえてくる。だいぶ近づいたらしいと判断したとき、食物を蹴飛ばし、もう少しのところ、わたしの足を踏みつける寸前、飛び越えて、窓にドシンと衝突した。窓から飛び出し、階下に落ちるのを、窓枠にからみつくようにしてこらえ、足が上、頭が下にならないうちに体を引き起こした。
彼はだまって首を横にふり、ハシゴを降りていく。彼がすでになにごともない正常な距離の部分に達したことに気づきながら、話しかけが可能だということを、わたしは度忘れしている。
――待って！　慌てて呼び止める。
――おろして！　いいわ、ハシゴを押えて下されば……。
一段おき腕の力で体をささえ、下の二段は滑りおちたことが快い。
おばさんが聞きたがっている。

――何事がおこったの？
――お部屋が広くなったみたい。ハシゴを登ってごらんになって。
――こわいわ、高所恐怖症なの。
――よかった。広くなった分、部屋代値上げされたらと心配したわ。

彼と街を行く。いつもは足で歩いていることを意識しているのに、足で歩いていることを忘れ、ワンピースの二つの大きなポケットに両手をいれている。足の悪いわたしの手は、いつもバランスをとり、転ぶときのために素早くささえられるように用心し、ポケットの中に図々しくしまわれはしない。それなのに、この自信あるポーズはどうだ。

くだもの屋から、バナナの匂い、米屋からヌカの匂い、酒屋から酒の匂い、あざやかに体のなかに流れてくる。あらゆるものを呑み込める途方もなく大きい胃袋を持った気分だ。彼はまだ障子のなかの生物に対してくやしがっている。

――いままで、気配はなかったの。
――なかったわ。
――朝起きて、障子までの距離が長くなったとか、障子が重かったとか……。
――なかったわ……、しいて言えば障子の桟にほこりがたまっていたかしら？
ラッシュアワーの人波が駅から吐き出される。
――こんなこと、聞いたこともない！
――あなたは、聞いたこともない現象に逢っても、陽気でいられるたちかと思っていたのに……。
人波は厚みをまして流れていく。この先に何があるのだろう。皮膚に重量感をもってくる厚いひとつづきの流れ、流されながら、わたしはそれでもみんなの足並みに合わずに遅れていく。背の高くて足の長い人も、背が低くて足の短い人も、ほぼ同じ速さで靴音をたてていく。
個性的な歩調は、わたしと、もう一人は彼。
――何故、普通に歩かないの？
――普通だろ！
――わたしに合せていたら、障子の彼ら以上の不躾な目で、後ろから見られるわ。耐えられる？
――……。

――みんな同じ方向に、同じ速さで進んでいくのね。

――行進だ！

この行進の、どのあたりに二人が位置しているのか、たしかめたい。背伸びをする暇もなく押してくる人波の中で、むさぼるように前を見つめても、人と人の隙間は、すぐ前の人の背につき当たって閉ざされたまま流されてしまう。

――あなたは、この行列の先頭に出るの。みんなを、わたしの部屋に導いていくのよ。

彼は歩きながら、わたしを見下ろしていたが、何も言わずに、体を人と人の間に突っ込み、急ぎ足で行ってしまう。なにしに何処へ行くのだろう。

いつもなにかが沁み出ている筈の目の底が乾いて、カサカサ痛くなり、黒いボツボツが無数に浮かぶ。わたしはこの位置から遅れないように進むことをする。囲んでいる人たちに隠してもらい、そのほかの誰にも見られない、わたし一人の一番早い歩き方で。

ヒザが体をささえてくれそうもないから、両腕を突っ張って、懸垂のように体をせりあげてのぼる。部屋のなかは薄暗く、ハシゴから部屋に乗り込むとき、ぐらぐらして悲鳴をあげた。

彼がいる。どんな方法で運びあげたのか、オートバイが部屋のまんなかにおかれ、オートレースの選手のように前方を見据えている。車体のふるえをみると、スピードをあげて突っ走っていることがわかる。

すでに昼の光のなかに、にじみはじめていた夜が急に、濃霧の海のように拡がって彼をひたしていく。前方の障子もたそがれ、黒い生物もさだかに見えない。

漸く彼はライトに気がつく。光をあびて障子の桟の影がくっきり浮き上がる。横の桟は上下にいくに従って徐々に影の幅をまし、縦の桟は、両横に行くに従って影の幅を広げていく。かあっと照らし出された四角のなかで、生物は集まって、キラキラと眼光を増し、彼の影は幕になって、わたしを含む部屋の半分をおおっている。彼はさらにスピードをあげる。服のそよぎ、前傾の具合でわかる。無意味なことだと気づかないのだろうか。もしも、到達する可能性があるのなら、障子を突き破り、廊下の戸をこわし、階下におち命はないにきまっている。何かしら耐え難い、何かしら不思議だという状況を解くだけのために、命をかけてみるだなんて、日頃の彼が持ち合わせていない無謀さ。果てがなく到着し得ないのならば、何処まで行って、何をして来ようというのだ。そのへんの理由に全く気

づこうとしない彼。
彼は上体を起している。しばらく何もしないで向こうを向いたまま黙り込んでいる？　両手で顔の汗をぬぐい来た道を振り返り、わたしを見る。用心深かそうに乗り物から降り、燃料をしらべている。
部屋のなかは真っ暗。燃料がなくなって帰れない彼と、はじめて同じ部屋で夜をすごす羽目におちいっている。
闇の中であらゆる距離が伸縮をはじめる。夜はそう簡単に来るものではないのに……眠るって、そう簡単なものではないんだわ。あなたが何故ここにいるのかわからない。親しく彼のそばに近寄っている誰か、少し身を寄せ合えば胸につつまれそうなのに、あるいは何時間か、はかりしれないへだたりにいる。その掴みどころのない距離にいて、何となく優しい慕わしさがつのってくる。天の川をはさんでいる二つの星に似て、見たところ、すぐそこにありながら、何光年も離れている。二人が、そんな不思議な位置にいるという、信じにくい事実をたしかめてみなければならない。
いつのまにか、目のなかのひからびた痛みと黒い点々は消え失せ、目はうるんではいるが、なにを見つづけたために生れたのか、緑色の四角が一つ、この部屋の闇をすかして見ることを妨げている。旅人のように歩き、疲れて、休み休み歩いた距離。排気ガスの匂いさえとどかない彼の進まない疾走。頭をたたきながら考えてみても、常識を越えた異常が依然として、この頭のなかに居座りつづけ、消

し去ることを拒否している。
――わたしのこころは、わたしに対してさえ、知らん顔をしたがるんだから、あなたに知らん顔をしても当然なのよ。わたしが、あなたにだけ、親しそうな顔をするなんてことになったら、わたしに対する裏切りですもの、裏切られるなんてこと、あなたも許せないでしょう！
――なるほど。しかし、きみに知らん顔をしたがる自分の心に、きみも、しらん顔をしてあげたらどうなの。
――嫌だな。わたしはそんな冒険ができるほど柔軟じゃないの。わたしの心は合図しあっていなければならないのよ。
――合図といっても、両方の折り合いを、よくする操作をしなければならないさ。
幸福が一生のうちの稀な瞬間をさすもので、恋いをすることが幸福だと言うのなら、恋いをしてもよい一生のうちの、その稀な瞬間は、いまのように不思議な瞬間をさすのかもしれない。
わたしの一生のうちの、今という瞬間なら、彼は、そばにいて遠く、遠くにいて近く、恋の許せる、ただ一度の稀なチャンスなのかもしれない。
それなのに、今、ひやかされでもしたように、わたしのほのかな優しさは、はかなく消えてしまう。わたしの心は不精で、許しているのに、恋することを怠けようとしている。捕らえどころのない闇が、

彼を消し去ろうとたくらみ、わたし一人と打ち解けようとしている。背を向ける。上を向く、彼の方を向く。

あらゆる距離が目のまえから限りなく遠ざかることを期待し、あらゆる距離が部屋のなかから、こわれ去ることを期待し、動脈のなかに空気が混入して流れている、にごった音を聞く。そう言えば片肺の一部から、ほうほうと空気がもれているようだ。耳のあたりに登って来て、ぼこんと穴をあけ、気泡は最大限に押しひろげられたこの部屋の、最小限にちぢまりきった距離の方に溶け込んでいく。

白い帽子とワイシャツがおぼろな彼、小さな寝息、または耳をつんざくイビキが、彼から立ちのぼり、距離の圧力でケシつぶほどになって埋もれる。

闇のなかの彼と、障子の彼ら。知ったことではない、わたしの闇はわたしを遠くにおく。

0・8×2＝1・6……0・8×4＝3・2……、もっとすっきり……0・8×5＝4……、そうだわ、左足の長さを1とすると、右足の長さが0・8だから、左足4歩について、右足を5歩動かせば、バランスがとれる。

なんで、いままで気がつかなかったのだろう。こうして歩けば正常だのに……、こんなにスムーズに歩けるのに……。

5、4、5、4、5、4、足の早いわたしの頭上を黒い霧が飛ぶ。

障子の生物が、おびただしい数の集団になって空間をおおいつくす。5、4、5、4、5、4。わたしは二、三歩に一歩は空中をけって、成長し押寄せてひろがる彼らの空間から逃げる。

ほの白い朝の光が戸のすきまから流れ込んで、何かの響きが伝わってくる。

わたしの体は、休息をもとめていて、実質のない目覚めにおり、時間にさからって真夜中の方に傾斜しようとする。多孔質になってしまった頭蓋骨が、かすかに暖まって外からの響きを粗雑に受けとめる。

手になにかがぶつかった。瞬間、自分を迎えいれ、閉じることになれた目をこすり、しばたくと、暗い中に白いものが、わたしと並んで窓際に寄りかかっている。目の前にいても異常なほど遠い距離にいるという記憶の迷路から、ちょっと抜けだせないでいる。

手にぶつかったのは彼だ。彼だと気づくと、わたしは犯されでもしたように驚き、声をのみこむ。まだあらくざらざらした灰色のかたまりで、どこが頭か肩かも区別できないが、闇のなかにさしこんだ細い光を目に寄せ集めて見とどけようとする。わたしの眠っている、ほんの短い時間に、あれほどスピードをあげて突っ走った距離を歩いて帰れるものだろうか。

――近寄らないで！

ちりぢりのちぢれっ毛になったような声をあびせ、彼の帽子を手探りで、ぐいっと脱がせてしまう。

彼はあわてて帽子を取り返そうとする。
――わたしをだましたのね！　遠くへなんか行かなかったのね。
――行った。
――行ったんなら、こんなに早く戻れるわけ、ないでしょう。
――ずーと走ってきた。徹夜できた。
――うそ！
彼は戸の隙間から流れている白い光の筋の中で、帽子を要求して手を出し、頭の上を白い光が通る。わたしは髪にさっと手をおく、汗ばんでいる。髪がかわいそう……。
彼は何度も頭に手をやっていたが、わたしの手をとる。とられた手は、彼の弱味であるそこに触ったのだという罪悪感でちぢみ、払い除けるのをためらっている。
――ずーっと遠かったの？
――五時間くらいだと思う。
――疲れた？　彼はちょっと考え込む。
――きみは、ほんとに、ここにいるんだろうね。信じにくいことばかりだから……。
近くて遠く、遠くて近いことになれてしまった彼は聞き、暗く一色にぼけている障子の方をうかが

ってから肩を寄せる。

――あなたはこちらに戻ってきては、いけなかったんだわ。もっと、もっと、何処までも遠ざからなければ……此処にいて、此処にいるのでは、あなたらしくないもの。近くて遠く、遠くて近いことを完成するために、そのためにオートバイで突進して行ったのでしょう。駆け戻って来たのでは幸福を逃してしまう。距離にだまされては駄目。距離をだましては駄目！

わたしは右に動くことも左に動くことも彼に妨げられており、しかたなく、物見高い彼らを警戒し、彼の胸に顔をかくしつづける。

見えているのは風だけ。木も草もなく、平原がつづくばかり、透明な糸が曲線や直線をえがいて走りぬけている。わたしはおそるおそる、彼の腰につかまってオートバイに乗る。風は向かい風で、その透明な糸が恐ろしい圧力で両頬や耳をこすりおとし、髪にからみつき抜き取っていく。叫ぶ。

――おりる、おりる！　おりたけれども、帰るに帰れない。

――乗せて！　と叫ぶ。彼は遠ざかっていく。

――乗せて！　必死で叫びつづける。彼は消えてしまう。

風が天に向かって吹きあげる。透明な糸が上を向いて巻き上がっている地平線に、消えた彼が再び、黒い一点から徐々に大きくなってくる。彼はうまく風をさけながら、着陸できない飛行機のように、わたしを旋回するだけで止まれない。旋回する円は次第に大きくなり、遠心力で跳ね飛ばされたように、姿を消してしまう。

わたしの体はしだいに風にこそげとられて骨になっていく。

日光を写す、生物たちの新鮮な金色の目、体の輪郭は、うすいピンクの色に染まっている。障子に、おばさんの影が来る。もう昨日のように戸を開けようとしたり、はずそうとはしない。しかし指で穴を開けようとしている。彼女は知っているのだ。彼がはじめてわたしの部屋で夜を過したことを……。

彼の顔がこころもちむくんでいる。

――わかった！　わたしは急に腹立たしくなって、大きな声で言ってしまう。
――あなたは作戦をねったんだわ。彼は眉をよせて、いぶかしげにわたしを見る。
――しらっぱくれているわ。片道燃料で行って帰れなくなる、わたしの部屋でやむなく泊まる……、はじめから、そういう計算だったんでしょう！
彼にそんな計算ができるはずがない。だのに、彼はふてぶてしく、部屋のなかをひとわたり見回して、陽気に言う。
――あれっ！　大きくなったようだ！　こりゃ大変だ！
障子の生物は、かさのかかった月のように、うぶ毛がふくれて見える、体毛が密生しているのだ。わたしは目の前にあるものに、もう手を出す気もなく、この部屋のすべてを、遠い遠い景色として、横すわりで眺めている。何処から借りてきたのか、こうして昼の光でみると、泥でよごれきったオートバイが部屋の真中に居座っている。
――目障りだわ、持っていって。それができないなんて言わせない！
彼は聞こえないふりをし、はずかしいくらい大声で、人を呼んでハシゴをかけさせる。
今朝になったとたん、彼も障子の生物たちも、わたしを軽視して元気なのが気に入らない。

薄汚れている歩道の敷石は一枚ごとに傾きがちがっているため、日照が、ここではまだらに感じられる。わたしは無方向の方向に歩き、浮き上がった敷石につまずく。

喫茶店に入る。あちこちで話し合っている言葉は、多くは聞こえてこないし、不確かだ。わたしが勝手な聞き方をしているのかもしれない。

――何時もほんとは話したいのだけど、何も話せないの。話すことが何もなくて、だから、離れているか、騒がしいか、どちらかで、声がどうしても届かないのに顔だけは見えるという位置で、おしゃべりをしているみたいに、口をうまく動かし、しゃべっているぞって、見せかけてみるの。そんなとき、聞こえる筈もないのに、彼ったら、すっかり聞こえてるって顔をしてみせるのよ。

女は、テーブルに押しかぶさるようにして、フォークを口に運んでいる。前にいる男は、ぎこちない様子で、それぞれが孤立していると思わせる間隔を保っている。見えるけれども、話すことが聞こえない位置、みせかけの会話。離れているために聞こえず、距離は部屋の中にあるから見えている、わたしと彼の、遠くて近かった位置。そういう、みせかけの会話の出来る最高の場所を、この女に提

供してあげたい。
わたしは一番奥の、客の声の集まってきやすい位置で、体を迷子にしたような形で、テーブルの下に深く足をかくしている。
――聞こえないと分かっている時、わたしはめったになくニコニコ話していて、目尻のあたりに、としよりみたいなギャザを寄せているのかもしれない。彼は聞こえているって顔じゃなくて、はやく、誰かに見られないうちに、その表情を止めろ！って言ってるのかもしれない。
――でも、ずっと離れていて、声が聞こえないのに、笑いジワまでみえて？
どうやら女には、わたしの部屋は、見えることが近すぎて、適当ではないらしい。
店から出る。
赤ん坊を背負って、買い物カゴを持ち、日常性の匂いを振りまいて、女が行く。歩くと、片方の肩が耳まであがり、つま先のひらいた足が、横によじれ、古木の根のような筋をむきだしにする。後ろから見ても、その顔のゆがみがわかる。
――何故、赤ん坊が太ったのだろう？
――何故、買い物カゴに大根なんか入れているのだろう？
わたしだったら、赤ん坊も大根も、捨てて呪文をうたう。足の悪い女が、足の悪い女の後をつけて

いく。通行人は目をそむける。八角形の大理石の柱が並ぶ道を行く。とろりと光る一面にふたりが写し出されるが、すぐひとりが掻き消え、ふたりとも消え、ひょっと見ると、他の一面に急にふたりが出現して、足を引きずって歩く。もう次の柱にも、ふたりの足の悪い女がいるのだ。

人々の群がハシゴを登っていく。

――きみ！　列の後ろに並ばなければ、入れないよ。腕まくりをした男がいう。

――わたしの部屋なのよ！　後ろから登る人たちにつきあげられて、ハシゴを登る。

部屋に飲み込まれる人、人、人。押し合いもせず、平たくも見えない。この部屋は、いま、巨人の途方もなく大きい胃袋になって、幾十、幾百という人の流れを寄せ集め、呑み込んでいるのだ。

彼らは通り過ぎる。果てしない距離のひろがりに足下を閉じ込められながら、部屋のなかの地の果てまで、流れつづけていく。彼らは一体、いままで、どこで何をし、どんな住みかを捨ててきたのだろうか？

前を行く人が、真面目な前進の足踏みをしているから、みんなは自分の足並みを疑いもしない。前方を信じて振り向きもしない。

わたしは窓に登りついて、前方を見る。空気が灰色に曇って、彼と同じような白い帽子が、幾つか見えるが、見究めないうちに下に落ちてしまう。その気が全くないのに、奥へ奥へと動く人波に、巻き込まれないために窓際に立ちつくしている。

もはや、障子の生物に対する好奇心や、部屋の本当の広さを見極めるための探検と、かかわりもなく、前の人と歩調をあわせることが、思考のすべてになってしまっている。

足も共有し、思考も共有し、人間であることから、決定的に立ち去るまでの行進。

――悲しいことだわ、歩調を合わせることができるだなんて――、二本の足が、おんなじ長さだということが、間違いのもとなのね。

おんなじだってことが、こうも集まり易く、呑みこまれ易いとは知らなかったわ。ひとと足並みを合わせるだなんて、わたしには出来ないし、絶対しない。行進のドレイになるなんて……。

突然、わたしの眼球が軟化したのか、目を強くつむって開けると、むきみの貝みたいに、たぶん白マルのまんなかの黒マルが、目になっている。わたしは部屋のすみで姿勢を低くし、置かれるたびに、畳からはぎとられる靴裏の群を茫然と見つめつづける。

――ユキくん、どこをほっつき歩いていたの、待ったよ。彼がいる。行進の先頭に立てずに、置いていかれた顔、部屋のすみにはりついている顔だ。
――何故、そこにいるの？　何故行かないの？
――何人入るか数えているんだ。興味あるからね。
――で、何人入ってきたの？　彼は、数字に呑み込まれてしまったような、数字を呑みこみ、ノドにつかえてしまったような表情。
――数えることは、記憶の秩序正しいつみ重ねだからね。
――……。
――どちらかと言うと、僕の記憶はむらがるたちなんだ。距離にだまされるからといって、数字にまでだまされてはならないのに。
――失敗したのね、数えられなくなったのね。伸び上がって目算してほしいわ。人、人、人が、次々入ってくるから、わたしは人々の背と背で先が見通せない。
――見るとか、数えるとかいう現象じゃないんだよ。百人だとも、千人だとも、一万人だとも、見当がつかない。
上から見ればおびただしい数の群衆が、ただよい、偏光板を通して見るように、光にだまされつづ

け、生れては消え、消えては生れ、百人とも、千人とも、一万人とも、とらえようがない。数えることのできるものが、数であるのならば、数えられることを拒否するものは、数の反対物。測ることができるものが、距離ならば、既に距離は測られることを拒否して、距離の反対物に化している。

わたしが、障子の生物たちや、とりとめのない距離に親しんでいるうちに、何時の間にか、手なずけられ、わたしであることまで、否定され、わたし自身の反対物になってしまっているのかもしれない。

わたしの部屋に誰もかも誘い込んで閉じ込めてしまい、ドレイ商人のようにその数の多さを誇ることにしよう。数えることが不可能なら、わたしの知っている最大の数字が、その数であり得るのだ。

ふたりの話す声以外の声は、すべて外から部屋に入って来るもので、暑さでしわがれている。陽光にぎらついた色調の男女たちが、熱に浮かされ、ひしめき、ちょうどノドが乾いて水飲み場の順番をまっている子供のように口で呼吸している。

――聞かなかった！

――……。

――ほら！

――黄色くなったようだね、光の反射かな？

――ううん、誰だって、昼の部屋のとりとめのない光のなかでは、そんなふうに思うものだわ。

ギ、イッという音。

空気がにごってノドが痛い。いまの音が、わたしの歯をかみしめた口のなかでこだましつづけ、足もとの床に響いていき、床からまた立ちのぼって、わたしにまつわりつく。

おばさんが、ワンピースの袖のはりついた太い腕を振り回して怒鳴る。

――いいかげんで、やめて！　二階が落ちるわ！

人々はヤシの口上を聞くように、彼女をとり囲む。

――ミシッって！　家がこわれるわ！

彼女が声をはりあげれば、はりあげるほど、手を振り回せば振り回すほど、聞く耳を持たない人々が集まり、取り囲む。彼らは死体のように無言になり、ただの防音壁になってしまい、彼女の声は上にしかのぼらない。

――丈夫な空間だと思ったんだが、変形しているのかもしれない。今起こっている音よりも、ずっと多くの目まいが休みなく押寄せているのに、彼は現実ばなれした落ち着きで足を組んでいる。

下でおばさんが、肩からぐるぐる腕を回しつづけ、まだ、怒鳴っている。

――ユキさん！　一体何人登っていったの！

わからない。投げやりな答えは、するよりしない方がよさそうだ。
――あなたのお部屋でしょ！　いやだ！　入って来ちゃ困るって言うの！　言わなきゃならないわよ！　彼女はハシゴをはずす。ハシゴの下の部分が前後左右によろめいている。
四角のなかに封じ込められた、はてしない距離。おびただしい人がいると言う確かさ。なにをするために、何処にいくのか。お互いに聞き合うこともなく前進している人々が、この時になって、はじめて、急速に遠ざかる、信じにくい不思議な足音をたてる。後続を断たれて、行進が過ぎた窓際の空白に、ふたりはほっと息をつき、靴裏の群れを見ている。
倒壊寸前、この部屋の主人として、わたしは怪物的な時間を持たなければならない。天井を下、床を上、何回でもガクンガクンと、上下ところをかえて、黄色いギザギザの線が、端から端まで走り終わらないうちに引き返させるのだ。彼は何時のまにか、まるで支配者になったみたいに上にいき、さかさで眺め、すぐ下に戻って来る。
突発的な強音は、なかなか響かない。はじめも、終わりも、コマギレの音が無数に付随して起こるものなのだろう。破壊し始めてから、決定的破壊を避けて、黄色い空間を走りつづける小さな音が、意外にも、天井や床の、すみずみまで、明るいものにしている。
彼のどこともなく指した、あやふやな握りかたの手が、わたしの肩のあたりに浮いている。その爪

のミカヅキの大きさは、爪の半分もありそうだ。
――いまの音！
――四方から、いちどきに出た！
音。
部屋のすみから黄色いけむりが吹き出す。目がちくちくする。砂が落ちてくる。
また、四方にはぜる音。天井に細めに開いた空を見る。相互に響き合っていた小さなキシミを、いっきに呑みこむ轟音。
ギ、ギ、ギィ―、ドド―ン。ドーン。

茫漠とした時間がただよって、気絶したのかもしれない、目で見ていなかったのかもしれない。わたしは生命の奥の窮屈なところから逃れ出たくなってしまう。
人々は暗闇に堆積し、その上にいるわたし。

救急車のサイレンが聞こえてくる。
わたしのまわりをまわりつづけている何か、無数のかよわい泡をつないだようなふたしかな像が、生まれながら消え、消えながら生れ、しだいに白さを増し、はっきり浮きあがってくる。はるかな記憶に、障子に黒い生物がいて、反転し、白い残像になって、それと合わさり重なってしまう。
――もともと、足が悪かったのよ。
わたしは言い続け、網膜にむすぶ映像が、体の外の出来ごとなのか、内部の出来ごとなのか、網膜そのもののひとりごとなのか、考えつづける。

完